手と手をつないで

No.358

山口 裕之（やまぐち ひろゆき）
（マザー・アース人権啓発研究所主宰）

人はだれもが周囲を照らす存在なのです

私が出会った方のことをお話しします。

ある年の暮れに福岡市の公民館で行われたオカリナコンサートを終えた後、私は角（すみ）さんに声をかけられました。このことは、私にとって人の生き方や社会のありかたを見つめ直すうえで、新たなスタートとなりました。

○オカリナを吹きたい

角さんははじめにこう言いました。

「私にもオカリナを吹けないものかと思っていましたので、山口さんの演奏をずっと見つめていましたが、オカリナというものは両手を使わないと吹けないものなんですね……」

角さんがまだ会社員だった57歳のある朝、脳血栓を発症してそのまま救急車で運ばれました。一命をとりとめましたが、左半身不随という「しょうがい」をもって退院しました。

角さんは、それをきっかけに会社を退職し、家事を担いながらもさまざまな趣味を探してきましたが、どれも長続きしない中、偶然私のオカリナコンサートのポスターを見て公民館に来たのでした。

私はこの日の角さんの思いを受けとめ、それから数週間、さまざまな方に相談したり、自分なりに知恵を絞って考え出した結果が次のことでした。

○角さんに合う楽器をつくり出せばいい！

私はスタンドとテープを用いて、右手のみで演奏できるオカリナを作成しました。「これで角さんも吹ける」と、私は大喜びで角さんの家に駆け込みましたが、実際は角さんにはこれを使うことは至難の業だということが分かりました。

それからは毎週、公民館の一室を借りて練習することになりました。その後の私たちのささやかな、しかし確かなあゆみはこんな言葉からも思い出されます。

「山口さん、私はまず一曲演奏できるようになるまではやめませんよ」

「角さん、頑張りましょう。角さんがきり拓いた分だけ、後に続く人々の可能性が開けるんですから」

その後、角さんはベートーベン作曲の交響曲第九番「よろこびの歌」を演奏することとなり、各地の学校や研修会でこれまでの経験や思いを私とともに語るようになりました。また、しょうがい者の仲間に呼びかけて合奏団を作り、さまざまな施設で慰問演奏をしたり、福祉作文コンクールに応募して自分の経験を広めたりしました。

○自分色に輝く、そのためには――

角さんがさまざまな場で発信し、示してきたことは多くの人々を励ましました。

「失った機能を嘆いて生きるより今ある機能を最大限生かすこと、それが私の選んだ生き方です」「しょうがい者は外国ではチャレンジャーとも呼ばれます。私はこれからも挑戦を続け、周囲を照らす仕事をしていきたいと思います」

私は角さんとともに行動し、〝人はみな、自分らしく、自分色に輝くことができる。そのためには一人ひとりのよろこびを生み出せる具体的な関わり（人のつながり・学び合いの場・制度……）が周りにあることが必要だ〟ということを学びました。